保育の難しさ

～三十三年目の驚き～

F・M

この雑誌に、〝保育の中の　小さなこと　大切なこと〟という題で、保育のことを書き始めたのは、何年前になるであろうか。〝おもちゃの取り合いのこと〟〝友だちの作ったものを　こわしたこと〟〝友だちのかいた絵を　けなしたこと〟〝ひとりで所在なげにしている子どもを、自分から動き出せるように、力づけること〟など、保育の中で、直面したいろいろな問題に、保育者として、どのように感じ、どのように願い、どのように行動したか……それに対して、子どもが、どのようであったか……など、具体的な場面を捉えて書いた。

当時、いろいろな方から、共感のお言葉をいただいたが、保育者の一人である私の友人が、こう言った。「うまくいかなかった例はないの？　そういうのも　書いてほしい……」

殊更に成功例をあげた、というつもりはなく、保育者として、問題にぶつかり、迷い、行動を選択

し、結果が見られた、というものが、エピソードとして　まとまりを持ちやすいというに過ぎない。

ところで、一昨年から担任をしているクラスで、私は、しばしば挫折を味わった。友人が求めた〝うまくいかなかった例〟はいくらでもあげられそうである。

このクラスでは、今まで経験したことのない初めての出来ごとに、いろいろと出会った。

先ず、三歳児クラスの四月、二十名のクラスの半数近くが、母親から離れず、泣いたり不安そうにしがみついていた。新入のクラスに、四月初め、何人か泣く子どもがいるのはごく普通のことである。しかし、半数近くが、泣いたり、母親を追ったりするのは、私にとって初めての経験で、やっと遊べる状態の子どもをも不安に陥れ、その傾向は増幅したと思われる。

泣いていた子どもの一人は、そのうち、他の子どもと水遊びを始め、砂場の水道を全開にし、掌で押えて水をはね散らすことに興じた。確かに面白いことではあろうが、周囲にぬれて被害を受ける子どもが出るので、止めないわけにもいかず、止めても、すぐに繰り返す。他の遊びに誘っても、じきに水に戻る。今までのクラスでは大半を占めていた普通に遊ぶ子どもが、このクラスには何人いたであろうか。〝電車を貸してくれない〟〝○○ちゃんが、取った〟〝線路を壊した〟など、次々と起こる事態に追われ、〝子どもの中に入って、一緒に遊び、遊びを楽しくする〟という、保育者の役割をとるゆとりもなく、後手にまわって、振りまわされた一学期であった。

そのような或る日、帰り際に、遊具の片づけや、帰り支度を急いでいると、F夫がバスケットを持って部屋に戻ってきた。このクラスは、今日はおべんとうのない日である。F夫は、帰りにどこかへ寄るために、おべんとうを持ってきたのだろうか。他の子どもの支度を手伝いながら、私は漠然とそ

う思った。F夫は、バスケットを開け、おべんとう箱を取り出し、蓋をあけた。三歳児は、初めてのおべんとうのとき、昼食まで待てずに、早く開けて見ることがよくある。私も、そのようなことを思い浮かべたが、今ここでおべんとうを食べるのは困る。私が止めようとしたとき、F夫は、中のスパゲッティをつかんで口に運ぼうとしていた。すぐに手を押えて、スパゲッティを戻させ、蓋をしようとして、更に驚いた。F夫のおべんとうではなかったのである。たとえ三歳児でも、他人のおべんとうを勝手に食べるようなことが起こるとは、考えてもみなかった。年齢なりの常識の中に組みこまれているように漠然と思っていたのである。私は、自分の判断の甘さに気づかされた。

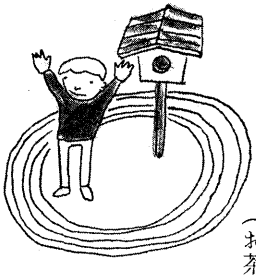
秋のお芋ほりのときのことである。D夫は、〃虫が恐い〃と泣き叫んで母親の背中にしがみつき、とうとう一度も畠に下りなかった。虫を恐がる子どもはよくあるが、D夫のような例は初めてであった。その少し前、D夫は、下に妹が生まれ、母親は下の子どもにかまけていたようである。D夫の不安定な様子は、それから冬まで続いたが、翌年のお芋ほりには、他の子どもと共に土を掘り返し、〃虫がいた〃の声に、のぞき込むほどに落ちついてきた。母親との関係が、子どもをこれほど不安にさせることを目の当たりに見たのは、私には、大きな驚きであった。

T夫の〃玉入れ〃も、私を驚かせたことの一つである。例年、運動会では、四歳の競技種目として〃玉入れ〃をしている。今年も、一週間程前から用意して、自由に玉を投げ入れて遊んだ。T夫も、「僕もする」といって加わったが、〃自分の投げた玉が入らない〃と言って、泣いて怒り、玉を投げ捨てた。T夫は、おべんとうのときも、〃自分が腰かけようと思った座席に、他の子どもが腰かけた〃と言って、他の空いた席には腰かけず、一人で床の上に座って食べたことがあり、意想外な行動をす

る。

今まで、多くの幼児と出会い、いろいろな子どもの行動に触れてきたが、それでもまだ、次々と驚かされることには事欠かない。初めての経験に驚くということは、それだけ〝子ども〟というものを知る機会が増えるということであろう。

難しいが、興味深い子どもたちである。あと一年の園生活で、子どもたちがどれだけ変わっていくか、恐いような、待ち遠しいような気持で、時間をかけて子どもたち自身が結晶作用をおこすのを見守りたいと思う。



（お茶の水女子大学附属幼稚園）